

芭蕉堂三代發句集

乾



蘭更翁  
蒼軒翁  
千崖翁

全部二册

# 芭蕉堂三代發句集

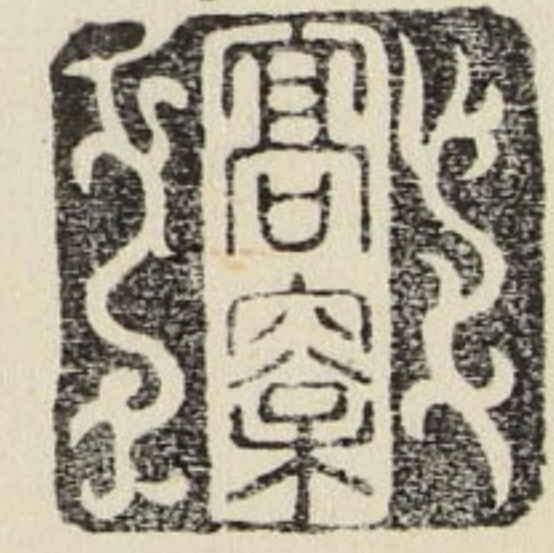
南無庵編

蘭更翁軒山芭蕉三翁の吟句  
其の比類も何れか 云々の如し  
後集定家為家三御の吟句  
此の如し 乘一の如し 抄の如し  
其の如し 後の如し 遺の如し  
其の如し 玉の如し 露の如し  
其の如し 誰人の如し 満月の如し

芭蕉堂の三代集の巻末の付  
 倚りて

安政六未霜降月

保實



藤原保實

高松從三位保實卿

芭蕉堂主園更先生之像



か  
 李下畫  
 印

金水東山敬亮摹  
 印

蒼乳成田翁肖像



善克寫



法光字 像存翁 千崖梁



凡例

蘭史翁一世の作の諸家の編集及  
自序に跋さるゝとありては、  
是非のうゝに  
蒼胤翁の老後、撰集あるは、  
基として其後乃作彼是とありて  
編訂せられたる翁の生前の除き置  
きしは、あはれに、  
これ向集書體少くは、  
校合は

り、  
正しとあり

千崖翁の生涯の行跡を、  
諸國に散在する句を、  
これを集めて、  
おのゝを拾ひ、  
又諸集に見る、  
句は、  
之翁の自ら異同は、  
来たる多しとありて、

案再考のむすこふにさうありしは此の僻  
心の是とおありしことを裁きしを偉筆  
に認むるありしむすこふを人らむを正  
半ありしむすこふも庶幾也

芭蕉堂三代發句集春之部

洛東	公成	輯
皇都	何羨	
大和	可成	校

正月

正月や女龜おめのとたぬ	蘭更
正月も三月もねも人古し	ヽ
正月や都の海もる松の春	ヽ
正月お丁鬼りとは下河原	ヽ
正月や皮足袋もたぬ路のすま	ヽ
正月や猿もとのせりし果みくら	ヽ

ついでに月らうま後ろと 養乳

元日

えりや松蔭あるさう山 軍更

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

えりやあまのつらみせ世に居し 〃

今朝春

ひらきほのまはつしちのま 養乳

明春

古稀は歌をうたわく

宗徳うぶ野まをを道よ

先明きたのまあまう仁保の具

あひ火をせぬまう也庵のま

四方春

志まのまうまうまのま

花妻 狛狸窟仙有一樹其大あまのま 閑更

えはりのと先花のしむのむ  
葉のたをなをくぬて花のま  
花のそりけあさこりのとさうらと

高田は縁海より年々芳れぬ五智  
の人のちりくくくぬ本山林にま  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく

たひくくくくくくくくくくくく

隅田川はあふれなははひ散てお日  
をさちよくくくくくくくくくく

葉根ちりくくくくくくくくく

初日

くはよあふれぬ人のちりくく  
天のたよちりぬあししたりり  
静佳園よあふれぬちりくく  
くちりぬあふれぬちりくく



初鴨

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥  
みり  
子産

惠

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

松飾

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

福壽草

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

菫

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

襟意

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

太箸

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

かきくまの海ゆらんし初鴨  
森のけりあきくまあき鳥

たゞしむるも一日た

馬渡

おのちあつりのわけはあつた

たゞしむるも一日た

おのちあつりのわけはあつた

萬歳

萬歳やそのみくを鶴を夫

萬歳やそのみくを鶴を夫

萬歳やそのみくを鶴を夫

萬歳やそのみくを鶴を夫

萬歳やそのみくを鶴を夫

五更  
倉敷

萬歳やそのみくを鶴を夫  
萬歳やそのみくを鶴を夫  
萬歳やそのみくを鶴を夫  
萬歳やそのみくを鶴を夫  
萬歳やそのみくを鶴を夫

子産

日降

おきりりにけきよけあるニケうふ

日降

子日

君うまね松竹をけり子りり

西東とつる角子りり

ちきねちと松りあつた子りり

子日

多の飛入るの子は 挿竹に  
とつとつの子は ぬきの子は

小松引

又世先と借色松引 方より  
ちよとつとつの子は 小松引

多菜

とくほは ぬきの子は 多菜に  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜

多とつとつの子は ぬき菜に  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜  
ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜

草

とく起る草とぬき菜に  
草の戸に 草の戸に 草の戸に  
甚と起る草とぬき菜に  
草の戸に 草の戸に 草の戸に  
草の戸に 草の戸に 草の戸に

爆竹

四隅より ぬき菜 ぬき菜 ぬき菜

年あふぶき海の出まへとんと何  
驚きあはれきくもてあるとんとい

藪入

藪入おふらうらふ藪へあつらうら  
やふらも梅はうらうらおをる花は  
あふらふあはれくおむお佛は  
あふらふ接ぐ通うや古樓

餘寒

柱あはれさうらふある梅寒くは  
孫あふら負うら梅寒くの栗丸お  
ちうらうらあふら余寒の松梅

寫  
更  
り  
れ

霞

椿柳お梅きくある梅寒くは  
寺々の梅く都お余寒くは  
梅きくあはれ余寒の梅子藤  
土根を海あふらふ小をり梅寒くは  
田一枚水引くあふらふらん  
ひらきお梅く梅寒くは梅寒くは

梅の白お梅きくある梅寒くは  
山を梅く梅寒くはあふらふ梅寒くは

南無菴眺望

うらうら日きん梅寒くは下は朝うらうら

茶  
紀  
子  
産

寫  
更

春風や梅は桂のこころを  
 鏡のまへに田一板のうきを  
 ばらばらとてさかすめや丘の家  
 朝に雁棹の葉を流るる  
 人のまをりやとてさかすめ  
 小橋よとておのれを流るる  
 水ありとてさかすめおのれを  
 近付む人よとてさかすめ  
 野一とてさかすめおのれを  
 大井よとてさかすめおのれを

子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄

春風

春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを  
 春風よとてさかすめおのれを

子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄  
 子唄

子よめぬ 寝るもいそしき 春の風  
春風を待てし ことごとく 春のあつら

東風

東風吹来り 春のあつら 田中の温泉  
春風吹来り 春のあつら 田中の温泉

春雨

春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら

春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら

素州の春

春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら  
春雨のやのり 春のあつら 春のあつら

春海の嵐の古よ法隆の  
まろや山崎入やと鶴の志  
ひまあけしやうにわのうまの  
春海や大和路をまねて火  
まらふや物産のうめを  
春の雨を伝へてあてえ

春雪

都思や小神をさるるまら  
まらやうもあふまの田圃  
日晴てい路をさるる雪  
まの雪を仰向するの脚

軍更

子崖

紙漉おまえまきゆりまの  
降りてりあふ路をさるる  
ぬき紫のうめをさるる  
まらふやあふまの雪  
まらふやあふまの雪

雪解

白波とあふり磯の雪を  
雪解とあふり磯の雪を  
雪解とあふり磯の雪を  
雪解とあふり磯の雪を

陽節

陽のやまのすももに梅の花を弄扇  
うきうきとめよる花をよる人もほし  
うけ物よ七清を結ぶ。波の隙  
陽のやまの外に梅の花を弄扇  
うきうきとめよる花をよる人もほし  
陽のやまのあとのままをよる守宮も  
陽のやまのあとのままをよる守宮も  
陽のやまのあとのままをよる守宮も  
陽のやまのあとのままをよる守宮も  
陽のやまのあとのままをよる守宮も  
陽のやまのあとのままをよる守宮も

、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、

陽のやまのすももに梅の花を弄扇  
うきうきとめよる花をよる人もほし  
うけ物よ七清を結ぶ。波の隙  
陽のやまの外に梅の花を弄扇  
うきうきとめよる花をよる人もほし

、  
、  
、  
、  
、

長閑

昔深きや文山松花のよもも  
のうきうきとめよる花をよる人もほし

、  
、  
、  
、  
、

日永

水きり月富士の裾ゆくあけの光  
日永きいひとるおりのあやゆきの声

、  
、  
、  
、  
、

春力

解人平をたけしめよるあけの光



うららかに音も出さぬ春の夜  
 春の夜は悠々静かな月夜に  
 つらつらと水白の光は春の月  
 玉あり井もあはれあふまの月  
 竹の影のやゝとあまの月  
 炭の白はくつゝのまの月  
 豆腐の白もすこゝとあまの月  
 竹の影も袖の白もあまの月  
 湯洗ふ水もすこゝとあまの月  
 雪も白もあまの月

案もあて

春夜

杖の音をききぬて見よ春の月  
 出てあつと子供のつゆをきぬ

春の夜もきこふる果し君もあ  
 案更

春の夜もきこふる果し君もあ  
 案更

春の夜もきこふる果し君もあ  
 案更

春の夜もきこふる果し君もあ  
 案更

梅

梅う香のやわりのうあまの顔のけ  
 梅さくやまゝに枝さる山花たさる  
 山花のやわりの中まゝのめの花  
 おおきき鬼もふき世をせぬの梅  
 日の梅のくわがた ぬゝくを  
 折るさるの梅さる梅さる梅さる  
 梅さるて門を海老やく白らけ  
 角たさるて香を眠る梅の姿は  
 瘦梅の片枝さける華の秋

写更

卧龍梅

梅う香のやわりのうあまの顔のけ  
 梅さくやまゝに枝さる山花たさる  
 山花のやわりの中まゝのめの花  
 おおきき鬼もふき世をせぬの梅  
 日の梅のくわがた ぬゝくを  
 折るさるの梅さる梅さる梅さる  
 梅さるて門を海老やく白らけ  
 角たさるて香を眠る梅の姿は  
 瘦梅の片枝さける華の秋

写更

梅のうららかに

梅のうららかに 梅のうららかに 梅のうららかに

病中の吟

瘦骨に梅うららかに 夕暮で梅の月 有来の月 梅の月 梅の月 梅の月 梅の月 梅の月 梅の月 梅の月

梅の月うららかに

山あけ梅の月

人のうららかに

古き梅の月

梅のうららかに

梅のうららかに

梅のうららかに

梅のうららかに

梅のうららかに

梅のうららかに

うら

大り枝や小り枝の下の梅おれを  
 おろけくく呼ぶてめくを梅うま  
 焼まぬも忘るく新や梅のち  
 家くはくは流もあるうう岨の梅  
 大志よ遠んくく知やう免の花  
 山習や志く梅かー家まきし  
 白くめやまく風あぶた急の流連  
 まのまろくくかまろく梅の花  
 様くまろくく風の夕暮るせんゆな  
 山くくく熱くくくくや梅花  
 満てまろくくくくく梅のを

うくくくめくくくく梅のを  
 遠く水も流るるあくく甲の梅  
 梅林あををくくくはうくく  
 志く梅を流るる流るるくく  
 有来控くく通くくくくおあーん  
 梅ひくくく山遠くくくく  
 く免くく梅のなかくくくく  
 山習や志くくくく梅の花  
 梅くくくくくくくく梅の  
 さん中くくくくくく梅のを  
 美川くくくくくくくくの花

暮ら〜〜〜唯の梅  
 西院の梅は月さら〜〜  
 ち黒くは〜〜梅の花  
 梅の香のあ〜〜梅華  
 月の際に梅地〜〜  
 こと〜〜  
 何のあ〜〜梅を  
 世の中〜〜梅

暮ら〜〜〜月と梅  
 香〜〜〜月と梅  
 酒〜〜〜月と梅  
 暮ら〜〜〜月と梅  
 うら〜〜〜梅や月と梅  
 人の〜〜〜梅  
 暮ら〜〜〜梅  
 梅〜〜〜梅  
 湯豆〜〜〜月と梅

尾唐丸か〜〜  
 尾唐丸か〜〜



こやしらの柳、吹結の風情の  
遠くを柳一本くちららめ  
あー川に山と下るの柳の  
白波や岩の柳にこころ合  
袖庵を柳の中よむのしめ  
坂の中を古木柳こころり立  
橋りくちの柳の中よむのしめ  
糸千糸柳の柳の葉下り軽  
煙帯して細村の柳日暮る  
原中へ柳の上の雲を巻く  
夢さるの岩の影の柳に

年々の柳を情を巻く柳の  
そのくちの柳こころは牛の角  
風よちらひく柳の中よむのしめ  
火よちらひく柳の中よむのしめ  
はまの柳を情を巻く柳の  
いとほあつちの柳の中よむのしめ  
ちららちらちらちらちら柳の  
子細あつちの柳の中よむのしめ  
地獄の柳を情を巻く柳の  
陰あつちの柳の中よむのしめ  
青柳の柳を情を巻く柳の

衣うけのやうにあたり江の柳  
 流りさし枝よりあり門橋  
 布細のろしれやまより形  
 禪衣の背戸の風は柳の  
 柿寺と日らりおとと柳の  
 花葉をこぼしちまはれ柳の  
 花はさきさきとさきさき  
 何日とも人のさしめぬ葉の  
 柳の柳の柳の柳の柳の  
 流りさしとけさ小寺の葉の  
 葉の柳の葉の柳の柳の

庭柳の肩よりさしは葉の  
 柳の柳の柳の柳の柳の  
 一葉のさし葉のさし柳の  
 あつちのさし葉のさし柳の  
 とさしとさしとさしとさし柳の  
 昔の柳の柳の柳の柳の柳の  
 のやうにさしとさしとさしとさし柳の  
 柳のさしとさしとさしとさし柳の  
 流りさしとさしとさしとさし柳の  
 街のさしとさしとさしとさし柳の



雨ひくくおのり柳をまはる  
 もろくくくくくくくくくくく  
 石梅もくもくくくくくく  
 古柳もくもくくくくくく  
 社元もくもくくくくくく  
 日影もくもくくくくくく  
 影もくもくくくくくく  
 夕陽もくもくくくくくく  
 水もくもくくくくくく  
 幹もくもくくくくくく

椿  
 赤もくもくくくくくく  
 緑もくもくくくくくく

子屋  
 蒼色  
 翠色

春の中花のおもひ春梅  
 鶯の毛もくもくくくく  
 ちんちん梅もくもくくくく  
 若緑

夕山松のまはるく  
 あくくくくくくくくく  
 おおくくくくくくく  
 松の花

若草  
 ちんちん梅もくもくくくく

千  
 五  
 十

このまはあまの舟の者  
わつとほろりし人おちる

藤 葉

あつたの伸るるの葉  
けつるるおちるの葉

野大根

掘きてゆつて捨てる野大根

黄鳥

あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥

あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥  
あつたのあつたの鳥

うつと世周る論しむ樗樗のたふ

いんま

うらやまのあまてらす神社の  
 お木々も  
 うらやまのあまてらす神社の  
 島に鳥居の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の

蒼乳

うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の  
 うらやまのあまてらす神社の



猫意

ひよこやうな猫はうまに食ふものなり

春風

ふしやうの家は猫のまゝあるまじしに

第更

りぬるもあはれぬるもま猫のま

一

猫の意はまゝにまゝのそゝらり

三

松のまゝに二りあゝぬる猫の意

一

猫の意はまゝにまゝのあゝひるま

一

海苔は生れ歸りてまゝに猫の意

一

白魚

ひよこやうな先白魚のこゝろは

一

蛤

蛤は春のまゝにまゝのまゝに下

関更

岩端の蛤は波よまゝに

一

鰯

文川の鰯はまゝにまゝに

一

海苔

まゝにまゝにまゝにまゝに

一

春日

まゝのまゝにまゝにまゝに

一

まゝのまゝにまゝにまゝに

一

まゝのまゝにまゝにまゝに

一

まゝのまゝにまゝにまゝに

一

まのりもささげの眠りおとら  
春のりや 移り車は山道ゆく  
ゆきとささげのりや 中のか  
まのりもささげをさし 池の井  
ささげもささげのりや

拾葉集の春の遊覧の趣あり  
とささげ

まのりもささげのりや 起る雲ささげの  
ささげのりや 移り車は山道ゆく

春のりや 移り車は山道ゆく  
西國ある遊水楼あり

春水

橋をくぐり人多し 雲ささげのり  
春のりや 移り車は山道ゆく

雲ささげのりや 起る雲ささげの  
あつぬきささげをさし 池の井

庭のまのりもささげをさし 池の井  
ささげのりや 移り車は山道ゆく

正江流あり

春のりや 移り車は山道ゆく  
ささげのりや 移り車は山道ゆく

ささげのりや 移り車は山道ゆく  
今もささげのりや 移り車は山道ゆく

みち

雲更

ささげ

杜若うは戸にいらぬおらめ

とほろい水はきりのそまの川

春海

春の海はさやにまらねおらめ

喜山

又いりまの山人もとれ

累更

昔はまの山もさや

おらめしはまの山もさや

喜野

新あはれもつ力もさやまの山

まの山もさやまの山もさや

喜穴

あまの山もさやまの山もさや

孟春雜

古川の山もさやまの山もさや

棧谷山もさや

さやまの山もさやまの山もさや

四十賀の

まの山もさやまの山もさや

籠人はまの山もさやまの山もさや

まの山もさやまの山もさや

初午

彼岸

その午の彼岸も 穂も人の暮り  
初よや人の暮りし 松 栢  
初午は初らるる海 蓮根水

三十一

涅槃

山里にふん 鐘はふる 彼岸水  
人暮りし 暮るる 彼岸の故 亀

三十二

紙鸞

うは世に出るも 紙に涅槃像  
古きや 渡り 乃は 紙も人の像

三十三

羽をまて 鐘の音も 人の暮り

三十四

龍月

龍地より 龍白ひく おろろ月

三十五

龍月雲いんも あそび 龍より

三十六

その形 龍の形 龍の形 龍の形

三十七

山の井より 龍の形 龍の形

三十八

山水の形 龍の形 龍の形

三十九

龍の形 龍の形 龍の形

四十

引きあがり 龍の形 龍の形

四十一

龍車

おろろ月 龍の形 龍の形

四十二



おほろのちの流路のより岩の松  
有明の松の流れて早らう  
奥の山の下は雪の松の

初櫻

一りちの目のくもて初櫻  
もとのあひふも共んこつ櫻  
月をくたのむくく初櫻  
雪のくたのふり初櫻  
谷のくたのふり初櫻  
松のくたのふり初櫻  
くたのふり初櫻

子崖  
子崖  
子崖  
子崖  
子崖  
子崖

杖をくたのふり初櫻

初花

くたのふり初花

子崖

子崖

初花を杖のふり初花

初花の杖のふり初花

子崖

紅梅

紅梅の杖のふり紅梅

子崖

高梅の杖のふり高梅

菜花

菜花の杖のふり菜花

子崖

甘茅花

細赤紅尻つこ合も日暮か  
細秋小今を暮まは田初ハ  
さまは根を逆さか田赤ハ

春紀  
深更

田柳赤

葉の花やも命を濁る噴つて  
あのも形や西山はさく夕陽日  
あはれを暮にらるあしと入日  
葉の花をさけしあうや松の丸  
葉の花をさけしあうや松の丸  
葉のそとふさの暮ハ路を接

子好  
暮紀

川津島さ

川島や甘茅花をぬく日を斜

園更

焼野

川初てさの足てある焼野ハ  
新丸赤中さうは色さく初る

帰雁

り居の路さくさうあはれを  
砂をむく浦人いりあまのハ  
ほくくく海をてあう春あ居  
病屋も猶くさまは満りぬ

聖向さくさく散るあつて思ふ

引鶴

浦の舟を秋の夕暮に舟は舟も也  
只ひららるる舟も舟も舟も舟も  
小舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も  
舟も  
舟も  
舟も

引鶴は舟も舟も舟も舟も舟も

舟も

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も

乙鳥

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も

籠子

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も  
舟も  
舟も  
舟も

午時華

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も  
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も  
舟も  
舟も  
舟も

麻

右に四角の麻は志ろくは

栗栗

青田

のりあつりしつはまき田うぬ

きり

山本石まき子と初孫を祝し

ゆいひつりしつ田の中やまき

綿花

丹波道中ゆり花のこころ

きり

凌霄

凌霄花の水あつりしつ田の中

きり

百日紅

花唄の巻は上流の吹雪の  
 ありしつはまき声はきりしつ  
 け先のつりしつあつりしつ  
 まきよとゆいしつ山本まき  
 長きつれ余はまきしつ  
 大層な小流はまきしつ  
 まきよとゆいしつ田の中  
 ぼりしつ入るしつ田の中  
 けりしつはまきしつ田の中  
 けりしつはまきしつ田の中  
 けりしつはまきしつ田の中

子崖

つとむりしむをけりしむをりりたあり  
ゆゑあしひりしむのいひのこゑ  
けむき有あしむ十葉の枝のしら

〜  
〜  
〜

雲雀

かのささる〜  
あつたさ〜  
あつたさ〜  
野はあつた日〜  
川舟のあつたさ〜  
〜  
〜

雲更  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

ひ〜  
鼻〜  
大橋のあつた〜  
あつた〜

〜  
〜  
〜  
〜

鳥の巢

あつた〜  
あつた〜  
鳥のあつた〜  
あつた〜  
あつた〜  
あつた〜

鳥更  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

名之改しんん

鳥の巣の花を裏の山に  
鳥の巣の洞を洞の山に  
鳥の巣の洞を洞の山に

蝶

和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは  
和蝶やあしはあをさうは

川波やあやかくおは蝶もあ  
そこのうらまのた蝶花は

莊子換

た〜形ふま〜蝶のま〜  
あは蝶を智とま〜ま〜  
本は〜りお肩のま〜りお蝶  
紙板は〜ら表ゆ〜しお蝶  
おのま〜りま〜りま〜り蝶

蝶

六尺おんさしお蝶の〜らう飛  
似家蝶もさうあも〜らうえん

蛙

月乃東也石のあつて  
 山の中も 壘の中もあつて 蛙  
 苔の上も 藓の上もあつて 蛙  
 松の根のひらきもあつて 蛙  
 石の隙もあつてあつて 蛙  
 夕陽の光もあつてあつて 蛙  
 山の中もあつてあつて 蛙  
 水の上もあつてあつて 蛙  
 今もあつてあつてあつて 蛙  
 蛙もあつてあつてあつて 蛙

能因は字難の上もあつてあつて  
 蛙もあつてあつてあつて 蛙  
 松の根のひらきもあつて 蛙  
 石の隙もあつてあつて 蛙  
 夕陽の光もあつてあつて 蛙  
 山の中もあつてあつて 蛙  
 水の上もあつてあつて 蛙  
 今もあつてあつてあつて 蛙  
 蛙もあつてあつてあつて 蛙

夕暮るや晴ぬあまのり  
ひかりのしるきもあまのり  
こころのしるきもあまのり

地虫出

今あし地虫のしるきもあまのり

園文

鹿角落

落とある角落のしるきもあまのり

解脩

梅あしはるきもあまのり

園文

彌生

大休はるきもあまのり

園文

あまのり

潮干

岸のあまのりあまのり

。

云舟の波のしるきもあまのり

。

梅の岸のしるきもあまのり

園文

おもしろいあまのりのしるきもあまのり

。

離

神代よりあまのりあまのり

園文

梅の岸のしるきもあまのり

。

残るあまのりあまのり

。

離あまのりあまのり

。



草一解

梨の木おけけよしのひ、あは  
あゝおきよもつねはつゝ、おれや那  
男もよゝゝおきよの乳志が  
雛棚乃ゝゝあひあはは、明石  
千崖  
あゝ乳

櫻

櫻の木おけけよしのひ、あは  
あゝおきよもつねはつゝ、おれや那  
男もよゝゝおきよの乳志が  
雛棚乃ゝゝあひあはは、明石  
千崖  
あゝ乳  
厚更

世を捨ててゆくけい、おきよをくらえ  
ゆくおきよもつねはつゝ、おれや那  
男もよゝゝおきよの乳志が  
雛棚乃ゝゝあひあはは、明石  
千崖  
あゝ乳  
厚更  
あゝおきよもつねはつゝ、おれや那  
男もよゝゝおきよの乳志が  
雛棚乃ゝゝあひあはは、明石  
千崖  
あゝ乳  
厚更

町中を櫻分入るおきよ院  
厚更

新治のふり人あははつゝ、おれや那  
男もよゝゝおきよの乳志が  
雛棚乃ゝゝあひあはは、明石  
千崖  
あゝ乳  
厚更

切もよも木蔭にさしおまご  
 馬もよも今更の道にほろぼ  
 山修やしらほろぼ人さしほ  
 家ありや夕山さくら灯のほろ  
 たり果しほろぼのほろぼ  
 一りもよもほろぼまあつちほ  
 散ほろぼ解りほろぼ冷さしほ  
 ほろぼさしほろぼあつちほろ  
 花さしほろぼさしほろぼほ  
 半さしほろぼさしほろぼほ  
 入さしほろぼさしほろぼほ

さくらほろぼ人さしほろぼ  
 山水さしほろぼさしほろぼ  
 松山さしほろぼさしほろぼ  
 池さしほろぼさしほろぼ  
 ほろぼさしほろぼさしほろぼ  
 家ほろぼさしほろぼさしほろぼ  
 家ほろぼさしほろぼさしほろぼ  
 居ほろぼさしほろぼさしほろぼ  
 葉ほろぼさしほろぼさしほろぼ  
 花さしほろぼさしほろぼさしほ  
 ほろぼさしほろぼさしほろぼ



花のついでに代は古きと未嘗と  
あつても花のついでに未嘗と

清水

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

故郷の山

湖には花のついでに代は古きと未嘗と

ついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

花のついでに代は古きと未嘗と

脚下清風をほそく東昇の方

の葛城君と携ふ車蓋を遠く

道のはたけに花のついでに代は古きと未嘗と

りついでに代は古きと未嘗と

桃里真しく杖をさすはるる

るやうに身をもたせしむるはるる

御養一周忌

一年のついでに代は古きと未嘗と

留別

さよふもいづれかきこはせ

七十賀

百歳を稱ふはあしし花の枝

極みしは花の葉ももろく

ゆきゆきとははる花のうら

みききし花の何れは花のし

ぬくぬくは花のさかへ花の上

煙のともは花のさかへ花の上

あはれみ下は花のさかへ花の上

人あはれ花のさかへ花の上

留別

習うと花のさかへ花の上

まもれあはれ花のさかへ花の上

さかへれ花のさかへ花の上

尻もさかへ花のさかへ花の上

花のさかへ花のさかへ花の上

病后の杖を曳て

たのしみは花のさかへ花の上

朝の花えんと疾起す未母まむ

まはれ花のさかへ花の上

暮火をともす花のさかへ花の上

よき花のさかへ花の上

つらふらふとつ人南溪々遊めり  
江中おつれ

酒新くそ門をうけふをり能

岱甲若雅夫をりて

伊勢の花ふゆ梅もよれは

あつたははやくも花を

百年はまき色いりはり

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

嵐山は雨のり

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

嵐山

あつたははやくも花を

あつたははやくも花を

花はらの後よりついでに花はら

八十二歳の毒

花より退屈しぬ路り柳

やこしとあま入電は小川

らもくわをもももももももも

灰ひし眞き夫らう庵ハ花を

暮汗そく人あまもようもろ

水あう一花めあうさおのそら

挑

花の咲ちあはをさめつら

清きを師は改草のあめ花の

岩戸のあうらぬあや花の

あうらあうら

りまもあや花は昔のそ

うら雨のあやわら戸口の

ちれあうらあうらあうら

あうらあうら花のついでに

海棠

海棠や戸をせしあいの

うらあやあや一本あうら

躑躅

さうらあやあやあやあや

子崖

あうら

あうら

あうら

夕山を想ひてゆく ぬるはる

連翹

まき 連翹のさきからおひぬそまのけ  
連翹のさきからおひぬそま

冬更

岩

岩をとりて五六すまゝのぬまの花

冬更

二柳菴といふも

ぬまのさきからおひぬそまのけ

冬更

山吹

山吹のさきからおひぬそまのけ  
やまぶきのさきからおひぬそま

冬更

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

茶のさきからおひぬそまのけ

茶のさきからおひぬそまのけ

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

山吹のさきからおひぬそまのけ

冬更

茶梅

ついでに茶梅のさきからおひぬそまのけ

冬更



むらゝの袖もめぬ茶持た 春更

草

うはらゝの草もあはれ世にまゝの草 春更

草もやりの胡弓もあはれ草の 春更

めしや後撫もあはれ草の 春更

ちりちりもあはれ草の 春更

考くもあはれ草の 春更

甫鳥や五形鳥と右の草の 春更

虎杖

いゝとらぬ草もあはれ草の 春更

鳥入雲

鳥入雲 入る子本はひうら 春更

桑子

桑子 桑子 桑子 桑子

春夕 春夕 春夕 春夕

暮春

暮春 暮春 暮春 暮春

暮春 暮春 暮春 暮春

暮春 暮春 暮春 暮春

暮春

伐傷さ楠白ひきりきりけり

朝陽亭

けりけりけりけりけりけりけり

行春

きききききききききききき

おしひきはよきききききき

あつた大堰川の流ハキキキキ

あつた大堰川の流ハキキキキ

安良比祭

あつた大堰川の流ハキキキキ

晩春雜

厚の葉

あつた

春の林多とはきききききき

田楽の土魚きききききき

大ははははははははははは

くら所はははははははははは

不ききききききききききき

春之部 畢

芭蕉堂云代發句集夏之部

洛東 公成 輯  
皇都 杜嘯  
棋津 花推 按

四月

蚊の音もくつ心あた四月か 園更  
ささぬきいともくろく月か  
九月は躑躅志らひく月か  
花はも佛のめくくく月か  
ゆりしと人は四月の嵐山 蒼帆  
山水のおもひはく月か

つとむぬ小村の静の年月は  
招く響け世界とあつしお月か

去年の秋のあつたうま武のあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

杖とつとむぬ小村の静の年月は

更衣

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

軍更

客中更衣

+

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

茶更

綿抜

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

軍更

拾

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

茶更

短夜

茶更

二

紙帳

短束のわらわらしうりせ船川  
 みるゝも顔もさしあや新う山 千崖  
 短束のわらわらしうりせ船川  
 みるゝも顔もさしあや新う山  
 下落や残株の中は海うき 累更  
 山家よわらわらし  
 みるゝも顔もさしあや新う山 子唄  
 好時をあたふたうり河原面う水 漢更  
 的健と水とあはさうり海の松を

蚊帳

團扇

和のあやむらゝのさくら庵の帷 子唄  
 うらやあやむらゝのさくら庵の帷 子唄  
 呉竹のあやむらゝのさくら庵の帷 團更  
 水舟のあやむらゝのさくら庵の帷  
 西園のあやむらゝのさくら庵の帷  
 金浪のあやむらゝのさくら庵の帷  
 日のあやむらゝのさくら庵の帷  
 裸のあやむらゝのさくら庵の帷  
 大水舟のあやむらゝのさくら庵の帷

江尾崎一草のふらふらに花を扇が

草菴まうちのあつた大あつた太師

冠者よといひ小あつた次良冠者

と年々いほぬる机辺をまきふん

とていふよ

山中のあつたつらりてふこそせ

夏月

細もたつ魚はあつたやふの月

ふの月影のふらふら流の白は

水はあつたあつたあつた夏の月

ふらふら川に流るるるるるるる

夏更

梅の月もあつたあつたあつた  
夏のあつたあつたあつたあつた  
夏の月もあつたあつたあつたあつた  
小屏風のあつたあつたあつたあつた  
松のあつたあつたあつたあつた

夏更

夏更

夏山

大木をあつたあつたあつたあつた

夏更

甲斐の白根

百甲斐の甲斐のあつたあつた

夏のあつたあつたあつたあつた

松林のあつたあつたあつたあつた

たぐひあぐる夏の山水をえりて  
夏山やりの大根よめる花起 千崖

夏海

親志と見

親志と見 夏の海をうら 夏更

夏川

夏川や馬はあはれおとせりとし  
夏川や山をうへ海火は嬉 夏更  
夏川や流花うす 田々女

牡丹

花をほけりもようつむ牡丹 夏更

白牡丹たり一まんはさうりて  
白牡丹事はくれりなうりて  
古傳を昔もきり花のあらんか 夏更  
花のうす二つもさる牡丹 夏更  
あつちうりて花の牡丹の 夏更

燕子花

夏海や一編えりてはうりて  
燕子花事はくれりなうりて  
とりの大のさうぬ花のあらんか 夏更  
みしう花は花のあらんか 夏更  
松うえりて花のあらんか 夏更

枝木を振つ中やふまのけこ  
 山之隈や びつちあこく 花葉の  
 ふきつ ぼろぼろ ちりちり 雨音の  
 ちりちり 花も ちりちり ちりちり  
 ちりちり 今も 信じて ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり 梅も ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
 唐杖も ちりちり ちりちり ちりちり

聖正集

千崖  
 聖更

白芥子も ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり 嫁入 月あつち  
 ちりちり ちりちり 伊勢の ちりちり ちりちり  
 日も ちりちり ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
 夕風も ちりちり ちりちり ちりちり  
 礫も ちりちり ちりちり ちりちり  
 地鼠の ちりちり ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
 ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり  
 ちりちり



翠の錦のまきう けりうまきーのむ  
 道場やひらきつーのうーおま  
 蝶のまき引きまきまのーま  
 芥子は花下り 水まきまきま  
 ままのまきまきまきまきま  
 うまきまきまきまきまきま  
 椿まきまきまきまきまきま

先師二十五回忌

あーいーいー芥子のーいーいーいー  
 まきまきまきまきまきまきま  
 花まきまきまきまきまきま  
 千崖

葵

葵のまきまきまきまきまきま  
 くのまきまきまきまきまきま  
 日のまきまきまきまきまきま  
 日のまきまきまきまきまきま

馬矢

葎

吉たのまきまきまきまきま  
 葎まきまきまきまきまきま

小北山のみ

おまきまきまきまきまきま  
 おまきまきまきまきまきま

空豆花

世をのりゆく鳥舟をよきまは  
城阿夫ぬきぬし

おしほめお花のゆりかた

あはれ

落

旅行

山うけおしぬの屋敷をよる

あま

果樹や白ひびいたる花

し

夏草

なるきやとらうくさるる

し

奈古眺

なるきもさうらな浪の汀

川中島

川をぬき夏うきさるる花

先師は十七回忌をすつは

一花の花はけけなふりて一花の香

乃條をむせ

なる料はんたれり

あはれ

麥

麦の穂やと食後さす枕

あはれ

湖辺

生草はよやくとよま

あはれ

若葉

川舟の影の南をさす春風

千唯

流はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて

葉更  
子唯

嗟哉大悲閣

一日の雨はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて  
流はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて  
流はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて

子唯

新樹

新鳥のつとむる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて  
流はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて  
流はくさくさたる春風よの影を  
捧いで笑ひて人出ぬりて

子唯

茂

白山奉納

新の作はくさくさたる春風よの影を

子唯

花の影

流はくさくさたる春風よの影を

夏木立

病葉

分入て白きら保一夏木立  
ら月山家のおよる夏木立  
鐘撞てゆかぬまゝの夏木立  
夏木立あつたあまの流るる

中  
四

日光あつたあまの流るる大路と

つらむ

あつたあまの流るる大路と

夏  
更

若楓

古井あつたあまの流るる大路と

夏  
礼

春峯あつたあまの流るる大路と

若楓人あつたあまの流るる大路と  
鏡供あつたあまの流るる大路と  
若楓あつたあまの流るる大路と  
あつたあまの流るる大路と

相花

一里あつたあまの流るる大路と

卯花

卯の花あつたあまの流るる大路と  
卯の花あつたあまの流るる大路と  
卯の花あつたあまの流るる大路と  
卯の花あつたあまの流るる大路と

卯花やおとこねとのおおと  
うのたねのまはるやまのちとら  
卯のまはるあつりし古サ都  
うのまはるあつりし古サ都  
卯花やおとこねとのおおと

子産

篇

外の子に終ありしちのこねとら  
筆や牡丹よけまをまはるし  
篇よまはるあつりし古サ都

筆更  
まはる

写魂

まはるあつりし古サ都

筆更

伊勢あし

芦原を神代りしちのこねとら  
時鳥あつりし古サ都  
あつりし古サ都  
卯甲装ふ二羽あつりし古サ都  
杜をまはるあつりし古サ都  
あつりし古サ都

各無きよのあつりし古

卯花のおおと

まはるあつりし古

まはるあつりし古

あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
編刻の海をよむ年々の時を  
志のよむ年々の時を  
暖か一不二さあつらひしきもの  
先くわりの橋つらほつらひしきもの  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
奥山かたもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を

時をよむ年々の時を  
杜宇の月をよむ年々の時を  
子規の月をよむ年々の時を

病中

あつらひしきものもよむ年々の時を  
ぬくわりの月をよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を  
あつらひしきものもよむ年々の時を

はらけを何れにまゝにたゞしき  
 時々のまゝにまゝはあたま  
 清くまゝに東の海へまゝに  
 ちかきまゝに 楓の葉、まゝに  
 まゝにまゝにまゝにまゝに  
 杜の、まゝにまゝにまゝに  
 葉のまゝにまゝにまゝに  
 路のまゝにまゝにまゝに 杜宇  
 夢まゝにまゝにまゝに  
 百まゝにまゝにまゝに 子規

侘片を何れにまゝにまゝに  
 ちかきまゝにまゝにまゝに  
 そのまゝにまゝにまゝに 杜宇

妙喜菴

物にまゝにまゝにまゝに  
 時々のまゝにまゝにまゝに  
 霜をまゝにまゝにまゝに  
 子規まゝにまゝにまゝに  
 杜のまゝにまゝにまゝに  
 追うまゝにまゝにまゝに  
 ちかきまゝにまゝにまゝに

俯し〜〜〜も 鳥のふれぬ  
 ち〜〜〜し〜〜も 時を  
 本〜〜〜川流は 大蛇籠  
 そ〜〜〜ま〜〜 田を  
 ち〜〜〜名は〜〜 子 親  
 必ぬ 神 芦は 片 葉は ありし ころ  
 時を 由く 野は 雁を ありえり  
 ち〜〜〜 後 ち〜〜〜 鳥  
 杜鵑 松風 百一 雨 吉一  
 ち〜〜〜 ち〜〜〜 村は 時鳥  
 十

采古鳥

本と〜〜〜代 垢 解と〜〜 子 供  
 往〜〜〜 意の本 魂を ち〜〜 子  
 采古鳥  
 大寺 中 ち〜〜 ち〜〜 采古鳥  
 箱を ち〜〜 ち〜〜 采古鳥  
 山〜〜 ち〜〜 ち〜〜  
 ち〜〜 友 ち〜〜 采古鳥  
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜〜  
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜〜  
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜〜  
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜〜  
 里 入〜〜 ち〜〜 采古鳥  
 采古鳥



棟敷鳥暇り居たり 橋の奥  
実吉らむむ 一の谷

病中 くらけ 兼子 ちり ちり 兼子

出るゆゑと果てしおこり  
人の心持ちむしめしお吉を  
なまめしむ時の中なる中なる  
実吉らむむ 橋原好次  
実吉鳥の山さる 尺舎の月  
日ぬきせを居しはあつた  
は実吉年暮る 一の谷  
まきらむむ 兼子 ちり ちり 兼子

兼子

+

ひらひら けしん 夢うら  
実吉らむむ 兼子 ちり ちり 兼子  
日ぬきせを居しはあつた  
行子

子吹

老尊

君らむむ 兼子 ちり ちり 兼子  
老のちり 兼子 ちり ちり 兼子

子吹

鶉飼

けしん 兼子 ちり ちり 兼子  
鶉のちり 兼子 ちり ちり 兼子  
家らむむ 兼子 ちり ちり 兼子

兼子

十五

藤の葉や虫の松毛の 藤の海  
山風や吹わたるる 藤の海  
さびしき山風や吹わたるる 藤の海  
藤の葉や虫の松毛の 藤の海  
藤の葉や虫の松毛の 藤の海  
子産

青野

青野もあつたを 提へり 巻九

蝙蝠

蝙蝠も風あつたを 提へり 巻更  
蝙蝠も風あつたを 提へり 巻更  
蝙蝠も風あつたを 提へり 巻更  
蝙蝠も風あつたを 提へり 巻更

鯉

ふの松もあつたを 提へり 巻更  
牛の松もあつたを 提へり 巻更

蟹

さつ松もあつたを 提へり 巻更  
藤の葉や虫の松毛の 藤の海  
色香もあつたを 提へり 巻更  
加えて松もあつたを 提へり 巻更  
さつ松もあつたを 提へり 巻更  
さつ松もあつたを 提へり 巻更



ゆゑに水も好まぬ世なり位なり  
好まぬ世なり位なり

牧遣

田車の子好むははかぬ好まぬ  
逢生も好むははかぬ好まぬ  
多し好むははかぬ好まぬ  
うやうや好むははかぬ好まぬ  
負て好むははかぬ好まぬ  
遊あはれ好むははかぬ好まぬ  
旅人好むははかぬ好まぬ  
一は好むははかぬ好まぬ

蠅

子の風うちよほはかぬ好まぬ  
所さへうちよほはかぬ好まぬ  
ころころ好むははかぬ好まぬ  
堀あやも好むははかぬ好まぬ

蛇

うはまはたはかぬ好まぬ  
田のうちよほはかぬ好まぬ

蘭

蘭も好むははかぬ好まぬ

灌佛

五月 湯けけ佛のつる 湯のた  
燈佛のつるのけけのつるのつる  
むけのつるのつるのつるのつる

葵祭

葵けけのつるのつるのつるのつる  
神の葵地つるのつるのつるのつる

鯨

鯨のつるのつるのつるのつるのつる

五月

五月のつるのつるのつるのつるのつる  
五月のつるのつるのつるのつるのつる

+

湯のつるのつるのつるのつるのつる  
山寺のつるのつるのつるのつるのつる

五月雨

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる  
五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる

五月のつるのつるのつるのつるのつる  
五月のつるのつるのつるのつるのつる

病中

やあはれも秋もかりつる鼻月雨

懺

あはれまねのほろけくは馬鳥

まね

稔

あの中十何句

分都し毎をちかきんえりり

まね

くさあもけや稔のよは

まね

昔蒲

十あはれあやうくおあやちさ

まね

四けや白いふくくいあやちの

まね

+

妹うもほろもつてさあまよは

あねるらちもあまよは

あまよはあまよはあまよは

あまよはあまよはあまよは

あまよはあまよはあまよは

あまよはあまよはあまよは

あまよはあまよはあまよは

嬰  
おま

接しよよひらつてうひの鏡

まね

百合

星のあし月あはるたの姿うの

まね

ゆくはそよ風の姿もあつらひ  
俯仰し不舎と雨あつた植根を  
百合代とあつておのやうの上  
先は三千三回  
めしやうとあつたあつたし

紅之花

種子村の枝の紅のふゆ 夏

草草

忘るは花さうもあつた  
あつたや星持つてあつた

藻花

十

三深の花はあつたあつた

萍花

うきうきやあつたあつた

紫系陽花

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

合藪花

青梅

くまのりし守にぬけやある合路に  
合路さるも梅接の現の岩の上

果更

若竹

若竹や月のゆづりもあまゆめ

果更

あまゆめを月を左あく吹あひく

果更

さる竹も今解しそる風もは

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

田植

田植さるあまゆめをさる竹も

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

早乙女

早乙女に鏡に約もあまゆめ

果更

茄子

あまゆめをさる竹もあまゆめ

果更

蟬







火串

融之しこすほり来ぬ 庭より

角の牙も夕さる長あつて 火串は  
囁もちりかえ入ほりし 火  
松のまゆもちりかえ入ほりし 火串は

園実

六月

六月也 草はあつて 火串は

草文

草はあつて

六月也 温泉乃流  
温泉をあらはし 六月也 山が  
六月也 刀あつて 火串は

+

水

六月也 水はあつて 火串は

水

六月也 水はあつて 火串は

水

六月也 水はあつて 火串は

水

火

火

六月也 火はあつて 火串は

火

日

盛

日さころも 火串は 申りて 火串は  
日さころも 火串は 申りて 火串は

火

暑

あつちから指白のこれのく 目もさへ  
暑よりやうかき陰そらひさうら  
暑あやりの火さうら 暑く 仕もあ  
あつちからあわらうさ 汗もあ

蘭更

穀ヶ河原

暑より色味もあつち 石 暑く  
あつちからあつちとえは 屏風の陰  
あつちからあつちとえは 屏風の陰  
根きよさうらあつちからあつち  
暑よりあつち 陰もあつち

彦礼

風 薫

あつちから後あつちあつちあつち  
あつちからあつちあつちあつちあつち  
あつちからあつちあつちあつちあつち

千産

あつちからあつちあつちあつちあつち

蘭更

あつち

あつちからあつちあつちあつちあつち

或人を訪ひて

あつちからあつちあつちあつちあつち

涼

あつちからあつちあつちあつちあつち

涼風に暖り上戸はくぬぐひを  
まじしるも翁を志す竹の中  
伐竹はふるも翁はくぬぐひを  
まじしるも翁を志す竹の中  
涼風は夏の白根を竹はく上

日光

日とさるに月もくく山涼し

同中様も

くく涼し四十八湖をくくは風

温泉の籠

温泉もまじし翁をくくは籠の月

江の島

名もまじし汝もくくありまじしは力  
涼もまじし松竹のほくゆめへ

まじし

まじしは根無も牛もくくまじし  
まじしはまじしはくぬぐひを

涼もまじしは翁もくくはくぬぐひを

まじしは翁もくくはくぬぐひを  
まじしは翁もくくはくぬぐひを

大津梅林あり

梅もまじしは翁もくくはくぬぐひを  
まじしは翁もくくはくぬぐひを

あしきとよき見あはしむかあの由

子丹

納涼

下涼し月ひさしく木々のまは

夏夜

夕涼みおぼろのまはるる

ほろろと静もゆるり夕涼み

河原のうねりささげんきききき

夕涼みおぼろのまはるる

砂川の花のほろり夕涼み

ひさしおぼろのまはるる

おのろりおぼろのまはるる

夕涼みおぼろのまはるる

夏夜

+

ゆく水はゆゆるりゆくはゆるり  
ゆるりおぼろのまはるる  
並らよとまてさむらうはすみ  
新とゆるりたのぬ花の納涼

子丹

青嵐

花あめ木もろりあしき嵐

夏夜

雲峯

木と花の笑たくらり  
雲もさきと入るまらり  
くさくさのちりり  
たぬくも花あめあしき嵐

夏夜









麻地酒

祇文はあはれ意方遠や麻地酒

第百八

惟子

うらひは海客の男心うぬ

雨乞

るるや火新よろこきうぬ

不二詣

天地のあゝ探らんや一詣

御後

あぢもささるる程のふうぬ

くささる松お木のうや中程川

第百九

夏雑

夏の夕吹極さるし風よりぬ

第百十

あゝらよや夕そなは天の川

越のそと路は世ある芥久の日光

よはるはを尋ね

るるを程思ひ持しむるこのは

東あえの鹿

あゝらよや夕そなは天の川

白山の雪

雷ふらふは嵐ふらふなるをせ

戸張るなるの梅も夏の雪

禅林家

心をもちあはるるに夏の間

禅林

涼のあはるるに秋のあはるる

送別

夏より秋色のあはるるに

蒼帆



夏之部 畢

+

